

ウォルター・リチャード・シッカート作《イングリッシュ・エコー・シリーズ》 を巡る批評 ―オメガ工房「模写と解釈」展を踏まえた視点から―

松崎 章人（公益財団法人岡田文化財団 パラミタミュージアム）

イギリスを中心に活動していた画家のウォルター・リチャード・シッカート（Walter Richard Sickert, 1860～1942）が1927年から1940年頃まで制作した連作絵画《イングリッシュ・エコー・シリーズ》（以下《エコーズ》）は、ヴィクトリア朝時代の大衆向けイラストレーション等を基にした油彩画の連作である。《エコーズ》に分類される作品の多くは、元となったイラストレーションの構図をほぼそのままキャンバスに転写し、写実的とはいえない色彩や筆致を用いて制作されている。

同時代のイギリスのモダニズムを代表するブルームズベリー・グループのメンバーであったヴァネッサ・ベルとクライブ・ベルによる論評は、あからさまに《エコーズ》及び作者のシッカートを軽視しており、先行研究では彼らの言論が後世のシッカートと《エコーズ》評に影を落としたとされてきた。一方、そうした《エコーズ》への否定的な評価に対して、発表者はこれまでの研究において、ブルームズベリー・グループの中心人物であり、シッカートとも親交があったロジャー・エリオット・フライ（Roger Eliot Fry, 1866～1934）が遺した芸術理論には、じつは《エコーズ》との親和性が認められることを指摘した。

その後の研究で、発表者はある展覧会にさらなる考察の手がかりを見出した。ブルームズベリー・グループのメンバーが中心となって結成された芸術家集団のオメガ工房が1917年に開催した「模写と解釈（Copies and Translations）」展が、それである。本展は、フライやヴァネッサ・ベルを含めた参加者それぞれがオールド・マスターの作品等を模写した絵画を制作し、出品・販売するという企画であったが、商業的にも批評的にも大きな失敗だったと考えられてきた。同展へ実際に出品された作品には、元となった作品の構図はそのままに色彩や筆致にアレンジを加え、油彩画として仕上げたものが多く見受けられる。同展覧会にキュレーター兼画家として参加したフライがカタログに寄せた序文では、オリジナルの単なる複製ではないある種の模写は「解釈」と呼称することができ、オリジナルへの何らかの関係性と芸術的な独立性を併せ持つ、と述べられている。

「模写と解釈」展の出展作品と《エコーズ》は、元となった作品が古典的「名画」か19世紀の大衆向けイラストレーションかという点を除けば、作品としての特徴が類似している。本発表ではこの「模写と解釈」展を仔細に検証することで両者の親和性を裏付けるだけでなく差異について考察し、ブルームズベリー・グループによる《エコーズ》批判の理由が、既存のイメージの転写という同作品群の制作工程そのものではなく、ヴィクトリア朝時代のイラストレーションを元にした点にあったことを明らかにする。